呉郡恵氏三代の文学

――清朝学人の詩の淵源――

近藤　光男

一

学人の詩あり、またもとより詩人の詩あることこそ、清朝詩の特質であるといえよう。ただ、まさしくこの時代、すなわち所謂る考証の学を背景にもって文学が展開したこの時代にあっては、詩人の詩、はなはだ学養に富み、学人の詩、はなはだ性霊を流露する。ただ、ことがらは、従来のいわゆる清朝考証学についての一般認識を以てすると、詩人の場合、学人の場合ともに、いささか理解に困しまれかねないであろう。というのは、詩人については、考証の学など文学とは無関係との古い認識が潜むためであり、学人については、性霊よりもむしろ当然、格調におもむくであろうとの常識的な予測がたち易いためである。しかしそのいずれの場合ともに、むしろいわゆる清朝考証学についての一般認識こそ是正されねばならないであろうことを、私はすでに『清詩選』（集英社「漢詩大系」22）他、若干の論考において明らかにして来たつもりである。

〈学人の詩〉ということばに私が始めて接したのは、吉川幸次郎教授京都大学講義録「清初詩論」（未刊）においてであったろう。たとえば銭竹汀（大昕）の詩について、「蓋清中葉學人之詩之尤可誦者。（蓋し清中葉學人の詩の尤も誦す可き者なり。）」というように用いられている。そして私は『吉川博士退休記念中国文学論集』に「恵棟と銭大昕―清朝学人

の詩の系譜―」を献ずる機会を得た（昭和四十三年）。本稿は前の旧稿の闕を補いつつ、もとよりそれに継ぐものとなることを意図する。

まず〈学人の詩〉〈詩人の詩〉という言葉、言葉というよりそうした発想乃至考察は、すでに清中葉においてあったことを明らかにしておかねばならない。清朝校勘学の名家、顧千里が、『国朝漢学師承記』の著で知られる江鄭堂、名は藩、の詩集のために書き与えた序に見えるのが、私の知るところの一である。

世の詩を論ずる者以爲らく、學人の詩有り、詩人の詩有り、と。此れ大いに然らず。詩也る者は、學中の一事なり。如し其れ學ばずんば、所謂る詩無し矣。

といい、ところで、わが友江鄭堂は、学人として人々に知られているけれども、江鄭堂が学人であればこそその詩は、神思すぐれ、体骨ひいで、用典はたしかで、音律は美しい。その生涯を詩人たるにかけている人でも、この域にまで至りえている人を見ない。

吾友江君鄭堂。人咸知其爲學人也。而其詩神思雋永。體骨高秀。鎔裁精當。聲律諧美。雖窮老盡氣。期爲詩人者。未見其能臻此也。

とまでいう。顧広圻（千里）の『思適斎集』巻十二（道光二十九年上海徐氏刊本）「江鄭堂詩序」である。これはもとより友人の詩序のためにする敬意が然らしめる過褒であるとしても、始めに「詩なるものは學中の一事なり」としたのを受けて、たとえ詩そのものに徹すべく生涯をかけても、学問のうらづけがなくては限界が知れている、とするのは、まさに乾嘉の学人の文学論であるといえようし、中国古典〈詩〉そのものの本質に係る問題でもあろう。

いま、かくいう顧千里その人に詩あるを知らない。一方、『隷経文』四巻を経学のすぐれた論文集として留める江藩にも、『江鄭堂詩』二巻が伝わるとは聞かないのであるが、ただ袁枚の『随園詩話』補遺巻一に鄭堂の詩を録する一条

があることは注意されてよい。袁枚は、

凡そ經學を攻(をさ)むる者は、詩は多く晦滞なれども、獨り蘇州の江鄭堂藩は詩能(よ)く清拔なり。王蘭泉司寇の高弟子也(なり)。

といって、「登濟雲山」詩、「寓樓」詩を引き、さらに「浜蘭泉從方伯升司寇入都」詩の一聯、「民情愛冬日、朝命轉秋官。(民情は冬日を愛す、朝命あつて秋官を轉ぜしむ。)」を挙げ、「抑何工切。(抑々(そもそも)何ぞ工切なる。)」と賞賛を惜しまない。袁枚は江藩を詩のうえで王昶の高弟としてとらえている。その王昶に『湖海詩伝』四十六巻の著がある。嘉慶八年、王氏年八十、王氏三泖漁莊で刊行された。その「蒲褐山房詩話」についに江藩の名を見ないについてのいきさつは姑く措く。学人にして詩名おのずから高きこと、それが樸学の名を以て知られる清朝呉郡の漢学の高雅な一側面なのである。

二

呉郡の恵氏三代とは、清朝経学の一つの、しかしまた基本的な、学的傾向として、とくに漢学すなわち漢代経学そのものの研究に意欲的にとりくみ、のちに呉派とよばれる学風を江蘇省呉県に築いた恵棟、遡ってその父恵士奇、祖父恵周惕の三代の学をいう。

その恵棟の高弟として、余蕭客は『古経解鉤沈』の著が示すとおり、よくその樸学を継ぐものであり、江藩はさればこそ恵氏再伝の弟子を以て自ら任ずる。また事実、恵棟が三十年の努力を傾注した著述『周易述』が未完に終ったのを、『周易述補』を作って完成させている。またこの恵棟に師の礼を執って交った人に、王鳴盛・銭大昕・戴震、そしてさきの王昶がいる。戴震を除く三人はみな、若き日、蘇州の紫陽書院に在り、院長沈徳潛が、ために『七子詩選』を刻して、いわゆる呉中七子の名ある人々であるなどについては、私の旧稿「銭大昕の文学」(「東京支那学報」第七・第八号)に詳しい。

王昶は乾隆十九年甲戌の会試に、王鳴盛・錢大昕ともども及弟して、同年秋、済南より帰郷の舟中での作、「懐人絶句」（『春融堂集』巻五）に「元和惠徵君定宇」を詠んでいる。

少日箋詩矜奥博　少日の箋詩 奥博を矜る
中年經術更紛綸　中年 經術 更に紛綸
仲翔易學康成禮　仲翔の易學 康成の禮
只有先生是賛人　只だ先生の 是れ賛人なる有るのみ

起句の下には双行の自注がある。「定宇に漁洋山人精華録訓纂有り」と。漁洋山人王士禎の『精華録』に注した早年の業績が、惠棟の文学としてあり、その注に惠棟の学問の深さがうかがえることをいうが、詩にはやはり漢の礼学・易学研究の第一人者としての敬意がより大きくうたわれている。

そこで『湖海詩伝』を見ると、巻十四に惠棟をおき、詩は「題高司寇其韋畫鍾馗」一首を録するが、その蒲褐山房詩話は七百字を超え原刻本の半葉を占める、ほとんど異例な量である。もっぱら惠棟の易学を述べる後半部は措いて、ここにその前半部について検討を加えたい。王昶の詩話は、まず惠氏の学の根柢から説き起こし、その著述が経学の淵源を明らかにした功に及ぶ。

惠氏四世經を傳へ、學士に至りて大に、徵君に至りて精なり。經術を論ずるに必ず漢魏を宗とし、六朝は之に次ぐ。其の史子の書に于けるも、亦た必ず唐以前自り取る。六書は說文に從ひ、輔くるに玉篇・廣韻を以てす。著はす所の書 凡そ十餘種。是より先き東南の文士、經誼に疏きこと百有餘年、徵君の出づるに及びて古學大いに昌んなり。

惠氏四世とは、惠棟の祖父周惕の父で、明の歳貢生であった有声にまで溯っていう。学士とは、父の士奇が翰林院侍読

学士であったから。そして徵君とは、恵棟が乾隆十五年〝経明行修〟の士を求める詔りに推挙されたのによる。ちなみにそのとき総督が恵棟を推薦した上奏文にあった、「博く経史に通じ、學に淵源有り」の句こそは、清朝経学の本質をよく表現したもの、として知られる。

丁卯・戊辰（乾隆十二・十三年）の後、予鳳喈（王鳴盛）・曉徵（錢大昕）・企晉（吳泰來）と與に、從ひて之を羽翼とす。繼いで盧雅雨（見曾）・畢秋帆（沅）又た爲に盡く作る所を梓して世に行はれしむ。而して四庫全書館開かれ、紀曉嵐（昀）・陸健男（錫熊）悉く其の書を取り、提要を作爲し、大指を發明す。然る後に古の經師大儒 流傳の緒、猶ほ其の涯略を窺ふ可きは、皆な徵君の力也。

そしてこのあと、はじめてその詩学を語る。

徵君の祖父は兼ねて吟詠に精し。蓋し漁洋に瓣香す。故に徵君 少くして精華錄訓纂を撰す。亦た箋疏の學を以て之を行ひ、極めて該博爲り。其の後 經術日々に深くして、復た詩を爲らず。

恵棟は『精華録訓纂』の毎巻首に「小門生東吳惠棟定宇撰」と署している。小門生とは祖父が漁洋に師事したによっての称謂であろうが、王昶にして「蓋し漁洋に瓣香す」と慎重な表現をとっている。後に述べる周惕の詩集「囈語集」に、新城先生すなわち漁洋の嘱による唱和の作を見るのが、僅かにその徵である。またここで「箋疏の學を以て之を行ふ」といっているのは、『訓纂』の書が一般の詩注とはいささか次元を異にするものであることを道破するものとして注目したいが、それは後稿に俟つとする。ついで「経学研究が深まるにつれて詩を作らなくなった」というについては、恵棟にはそもそも経学と文学とは相容れないものとの認識があったこと、またこの点、錢大昕と大いに異る点であることなど、旧稿（前掲吉川博士退休記念論集所収）に論じた。さて王昶の詩話はここで核心に入る。

然れども其の吳企晉の詩に序して謂へらく、詩の道には根柢有り、興會有り。根柢は學問に原づき、興會は性情に

發す。二者 之を兼ねて、始めて一大家と稱するに足る、と。即ち其の言ふ所、亦た藝を談ずる者 當に奉じて質的と爲すべき者己。

この根柢と興会の論については章を改めて述べることとし、ここはなお王昶の詩話をたどり終えることにしたい。王昶はつづいて、戴震やその師の江永には詩のないことを引きあいに出す。

時に休寧の戴東原震、均しく經學を以て稱せられ、且つ九章三角の術に長ず。但だ宗とする所は江氏愼修に在り。多く宋元の說を採り、徵君が漢學を鑽研する者と同じからず。詩も亦た聞く無し。予と善きに因つて、故に此に附記す。

戴段二王の学、のちに皖派とよばれる人々の学問を、呉派の学と対照するには、それがほとんど吟詠の口を閉ざしている点を以てすることもできよう。王昶は友人として親しい休寧の戴東原をも『湖海詩伝』に列したいのに、詩作があるとは聞かない。そこでともどもに師と仰ぐ恵棟の詩話に附記することとして、その学問の傾向の違いを指摘している。

王昶が収める恵棟の「高司寇其韋が畫ける鍾馗に題す」は、下平陽の一韻到底の七言歌行体である。恵棟の詩集の残らない今日に見うる唯一の作であろう。「高其韋」は高其佩（こうきはい）の誤り。字は韋之、号は且園、指頭画の名人であること、楊鍾羲の『雪橋詩話』巻三「指頭畫は明に始まり、高且園に至りて其の妙を極む」の条に、この詩題を挙げての指摘がある。

恵棟の詩句としてはなお別に一聯を存する。すなわち張維屏が『国朝詩人徵略』巻三十三に恵棟をおき、『潜研堂文集』『春融堂集』と注記しつつその小伝を構成し、「聽松廬詩話」に呉企晋詩序の文を引くのは、さきの『湖海詩伝』に拠ったものか、まったく同文であるが、そのあと「摘句」に、

若使當年傳漢易　若し當年に漢易を傳へ使むれば

王韓俗學久無存　王・韓の俗學 久しく存する無かりしを

と見えるのがそれである。そこに詩題の注記もなく、張維屏は何に拠ったものか。詩句の意はむしろ、あたかも恵棟が人から贈られるのがふさわしい一聯、と私には思えてならない。

三

恵棟の「吳企晋詩序」は、『聚学軒叢書』第二集に収める輯本『松崖文鈔』二巻の中には見られない。吳泰来の『硯山堂詩集』八巻の巻首に冠するであろうが、集は孫殿起の『販書偶記』巻十六に録し、「無刻書年月、約嘉慶間刊、」というのを知るのみで、まだその所在を知らない。ただ楊鍾羲の『雪橋詩話』三集巻六「恵定宇 吳竹嶼硯山堂詩に序して云ふ」の条には、より詳しく引かれているのを、ここにまず原文のまま、ただし句読のみ施して記す。

昔人言。詩之道有根柢焉。有興會焉。鏡中之象。水中之月。相中之色。羚羊挂角。無跡可尋。此興會也。本之風雅。以導其源。泝之楚騷漢魏。以達其流。博之九經三史諸子。以窮其變。此根柢也。根柢原於學問。興會發於性情。云云。

そしてこれについて楊雪橋みずからがその考えを述べていう、

吾謂(おも)へらく、本朝一代の詩を論ぜんには、當に此の語を以て衡と爲すべし。學問勝れたる者は、其の詩必ず人に異るの處有り。

と。このあと「竹嶼懐定宇詩」として吳泰来の七絶一首を記して一条を終えるのであるが、問題はこの始めにいう「昔人言」の〃昔人〃なのである。

これはむしろ意外なことであった、といってよいであろうが、王士禎の『帯経堂集』巻四十一漁洋文三「突星閣詩集

序」に、次の文がみえる。

夫詩之道有根柢焉。有興會焉。二者率不可得兼。鏡中之象。水中之月。相中之色。羚羊桂角。無跡可求。此興會也。本之風雅。以導其源。泝之楚騷漢魏樂府詩。以達其流。博之九經三史諸子。以窮其變。此根柢也。根柢原於学問。興會發於性情。

と、王士禎はまずこのようにみずからの詩論を展開し、次いでこの詩集の撰者王戩その人に及び、

戩は斯の二者に於て之を兼ね、又た斡らすに風骨を以てし、潤ほすに丹青を以てし、諧はすに金石を以てす。故に能く華を銜み實を佩び、大いに厥の詞を放にし、自ら一家を成す。

と詩集の詩人を賞讃する。問題の部分を、いま敢て重複を避けることなく、漁洋の文そのものとしてことさら別に掲げた。わずかに異同があるのは、「二者率ね得て兼ぬ可からず」の一句が入ること、また『詩』に源を求めるについて遡る流れを、「楚騷漢魏」というより「楚騷漢魏樂府詩」というほうが具体的であるにすぎない。『突星閣詩集』は王戩の撰。字は孟穀、湖広漢陽の人。漁洋の『感旧集』巻十六に詩三首を収める。鄭方坤の「突星閣詩鈔小伝」に、十八九歳にしてもうその集が世に行われていた、という。

ところで、かくては、王昶の詩話では、まったく恵棟その人の意見と読みとれる根柢と興会の論は、楊雪橋の詩話に至って、あたかも「根柢有り、興會有り」が〝昔人〟の言であり、以下つづいて根柢・興会のそれぞれについてその内実を釈するのが恵棟の文であるごとくに読めるのであったのが、ついにことごとくが漁洋山人王士禎の文であったことになる。漁洋山人に対して、若き日においてではあったが「小門生」と称している恵棟が、ここであるいは文の典雅なるを期してであるかにせよ、漁洋山人の名を隠して、敢て「昔人言」とした意図が、私にはなお理解しかねる。〝昔人〟という語の表象はどのようなのであろうか。「昔人有言」は李陵の「蘇武に答ふる書」（『文選』巻四十一）などにみえる

句である。

凡そ清朝の学術文芸に関心を寄せるほどの人ならば、清初に学人の詩といえば、顧亭林（炎武）・朱竹垞（彝尊）が、詩人の詩といえば、呉梅村（偉業）・王漁洋（士禎）が、自然に思い浮かぶであろう。いま、学人にしてこその詩論とみえたのが、実に一代の正宗、漁洋山人その人の論なのであった。しかし思えばこれは意外というよりはむしろ、これについて観ても、清朝文学の根底にあるものを悟るというべきなのではなかったか。同時に清朝〈学人〉の詩の淵源を亭林に、〈詩人〉の詩の淵源を〈漁洋〉に、もしただちに求めるとすれば、それはいささか安易にすぎる図式なのであって、本稿冒頭に述べた〈詩人〉の学養こそ、清朝にあっては、ことに忘れられてはならないことに思い至るのである。

四

以上、恵氏第三代、恵棟については、その僅かにのこる詩のあること、及び漁洋山人の詩と詩論に、平生よほど嚮往していたと認められる事実を観た。以下、恵氏三代の中で最も詩名の高い周惕、字は元龍、号は研溪に入り、その子士奇、字は天牧、号は半農を附説して、本稿を終えたい。

恵周惕の『研谿先生詩集』七巻は「東呉恵氏紅豆斎刊本」が京都大学人文科学研究所に蔵されている。七巻とは「北征集」一巻「崢嶸集」二巻「東中集」一巻「紅豆集」一巻「囈語集」一巻「謫居集」一巻であり、つづいて恵士奇の「採蕈集」一巻「南中集」一巻が附刻されている。附刻の士奇の集は、毎半葉十一行であることは周惕の集と異らないが、周惕の集が行二十二字であるのを行二十一字とし、版式は二字分ほど下げている。その南中集が第十一葉表二行を余白として終った処からあと、裏に亘って、士奇の作四首を墨筆で双行に書きこむのが、裏面末尾三行を余して終るが、その三行に、

研谿詩朴而粘滞天牧詩秀而流動七
古尤爲擅長自應特勝乃翁一籌

歸愚沈德潛識

と見える。「北征集」の題下に「長洲沈歸愚評選」と朱書するのと、全篇に亘る圏点、また概ねは眉欄に記されている評語などから、これは沈德潛がその『国朝詩別裁集』に恵周惕・士奇父子の詩を選評するに際して用いた原本である可能性が多い。巻末に見た綜合的な評語、「研谿の詩は朴にして粘滞し、天牧の詩は秀にして流動す。七言は尤も擅長爲(た)り。自ら應に乃翁に一籌を特勝するなるべし。」は『別裁集』の何処にも見出せない。ここに『別裁集』（恵周惕は巻十七、士奇は巻二十二）に選ばれている詩を原本の集ごとのかたちに整理してみると次のようになる。記号は●評あり、○圏点あり、×評または圏点なし、算用数字は『別裁集』において第何首目におかれているか、をそれぞれ意味する。

〔北征集〕出門四首第一首●○(1)　第四首×○(2)
〔崢嶸集巻上〕夏日寫懷十首第十首×○(8)
〔東中集〕棹歌四首第三首××(13)　從赤城至國清寺●○(4)
〔紅豆集〕夜坐有懷●○(3)　贈維楊顧書宣●○(5)
〔囈語集〕重九潘長公恬菴昆仲招同魏蒼石飲太白樓分韻×○(9)
〔謫居集〕敝裘（和查夏仲）二首第一首●○(10)　再用衣字韻二首第一首●×(11)　第二首●○(12)　同諸君興勝寺看杏花二首第二首●○(6)　再賦一首示崇木及同遊諸子●○(7)
〔採蓴集〕姑胥臺懷古二首第一首●○10　第二首●○11　坐月酬鄭鉞見懷之作××2　田家行××5　牧童詞●○3
（簇蠶詞×○・3後）　樵客行○×4

〔南中集〕張文獻行廟三首第三首◐○8　廣州十二月書懐二首第一首●○9　除夕寫懐三首第二首●○2　第三首××1
〔南中集巻末餘白墨筆〕送蔣樹存之官餘慶●○6　送陳秋田先生之官長寧×○7　題座主安溪相國紀伯父葆甫先生破賊詩後●○12　送除亮直編修奉使琉球●○13

評語にほとんど文の異同は見られず、圏点のある句もよく一致している。あまりすべてが一致すると、かえって後人が『別裁集』からそれぞれの詩に転写したものとの疑いがもたれるが、この紅豆斎刊本には、選ばれた詩には詩本文の頭に○が附けられている。○が附いていてさらに評語等もありながら、『別裁集』にないものがある。

〔東中集〕赤城山●○　〔謫居集〕苔同年楊崑木●○　〔採蓴集〕縹緲峰××　〔南中集〕送馮士垣歸山陰三首第二首●○　第三首××

「囈語集」にのみ恵周惕は序をつけていて、囈語、ねごとのうたと名づける所以を記している。康熙三十年進士となるが、〝国書に習はず〟として密雲県の知県に左遷される、そのときの作である、という。ちなみに、『別裁集』は「乾隆二十四年吳縣蔣重光等刊本」（京都大学人文科学研究所蔵）三十六巻が、銭謙益を巻頭におくのが乾隆帝の不興をかい、慎郡王に始める三十二巻の本に改めた。両者、詩人及びその詩の選定に若干の異同があることなど知られる。いま採蓴集の「簇蠶詞」は、原刊本にはあって後の本にはない。「牧童詞」に「下三章に連なり、皆な張王が體中の最も雅潔なる者なり」と評して「簇蠶詞」「樵客行」「田家行」をおくように、これも養蚕の労働をうたう、まずはのびやかな田家詩とみえるものであるが、この一首のみ〝卒章其の志を言う〟（白居易「新楽府序」）の趣きがあり、「君見ずや　繭税　年年國課に充てられ、浴蠶の嬢子　常に布を衣る」と結ばれ、しかもこの二句に圏点が附されている。もしかして聖代にふさわしからぬものとしての遠慮か。

ところで『国朝詩別裁集』も詩人ごとに小伝と、おおむねはそのあとに詩話というか比較的簡潔な詩評が見える。こ

こに恵氏父子について沈徳潜の評をまずみることとする。小伝の部分は省く。『別裁集』に恵棟はない。恵周惕にいう、

研溪先生は業を堯峯汪氏に受く。故に詩格毎に唐宋を兼ぬ。然れども皆な自ら新意を出だし、風神轉た佳にして、他人が宋人の字面を摭拾して、以て能事と爲すに似ざる也。生平 經學に邃く、貫穿融浹、亦た第に詩家を以てのみ之を品目せず。

汪堯峯、名は琬、のために『堯峯文鈔』五十巻の序を「癸酉（康熙三十二年）春正月門人惠周惕書於京師之瀛州亭」と署して書き、王琬はまた周惕の『詩説』のために序を書いている（『堯峯文鈔』巻二十六）。宋詩きらいの沈徳潜にして、周惕を学人としての敬意でもあろう、周惕の詩格が唐宋を兼ねることによって好ましい風神をかもし出していると讃辞を惜しまない。始めにおく五古「出門」詩は、壮年に家計に窮して都へ旅出つときにちがいない。「饑寒 腐儒に迫り、顛倒して奇想を作す」のうたい出し一聯は、張維屏も「摘句」にとる。五古「夜坐有懐」の澄徹な詩境は東坡南海詩の趣きがある。

青天如澄江　片月初洗出　草光露離離　樹影風瑟瑟
寒更夜點疏　驚羽孤飛疾　惆悵不成眠　懐人坐終夕

沈徳潜は「簡の極み、高の極み、」と評する。「贈維揚顧書宣」は七古。江都の人、顧図河に贈るその詩中、「人生癒眼不自見、願以妍醜煩青銅。（人生眉眼自ら見ず、願はくは妍醜を以て青銅を煩はさんことを。）」自分の顔の妍媸を知るには、鏡のお世話になるほかない。これまた沈氏は圏点を附し「妙喩東坡に減ぜず」といい、張氏も「摘句」に引く。五古「敝裘 査夏重に和す」については、査慎行の『敬業堂詩集』敝裘集を見ねばならない。初白（慎行）みずからの序によれば、甲戌すなわち康熙三十三年、四十五歳、十二月以後の作、都に出て宣武門外に家し、姜西溟（宸英）・恵研溪と〝寓舎相望み〟、新年より詩酒の会を開くことを約したといい、これに次ぐ「酒人集」が翌三十四年正月から六月ま

での作であるのに亘って、恵周惕らとの分韻など交友の詩が見える。「敝裘」末尾の一聯、「歳寒惟爾堪相倚、忍爲豐貂易素心。（歳寒くして惟だ爾の相倚るに堪うるも、豐貂の爲に素心を易ふるに忍びんや。）」に沈氏は評していう、「一結用意の厚きを見はす。物に待ち人に待つこと、倶に此の如し矣。推して之を廣むれば、詔りして故劍を求むるも、亦た是れ 此の意なり。」と。

恵士奇にいう、

半農 少くして卽ち志を經史に篤くし、而して經學に於て尤も深し。著に易說・春秋說・禮說・大學說等の書有り。皆な晩年論定の者なり。學を廣南に視、經術に通ぜしむるを以て先務と爲す。空疏の舊習、之が爲に一變し、操行の潔きこと、白圭振鷺に比す。廣南 此より前 未だ嘗て有らざる也。身後 韓山に祀られ、昌黎韓子に配食され、今に至るまで之を尸祝す。詩は唐人に近く、自然を以て宗と爲す。研谿先生の家學に視べて、各々得る所有り。

この詩評に添うかと思う一首「廣州十二月書懷」は、

風物遊子を娛ましめ、孤懷强ちに自ら寬うす。鷓鴣は歳暮を知り、鸚鵡は冬寒を訴う。山上飛鳴好く、樊中飲啄安し。憐む可し珠樹の鳥、地の金丸を避くる無し。

沈氏の評は「飛鳥を寫すは、卽ち自ら懷抱を抒ぶ」と。

最後に沈德潛は選ばない「木棉」詩一首を記す。広東学政を二期勤めた恵士奇の「南中集」ゆえに、坡詩を意識しての作と思う。木綿は南海の地の大樹。

猶記看花水殿旁　猶ほ記す 花を看し水殿の旁
乍疑朝日出扶桑　乍ち疑ふ 朝日の扶桑より出づるかと
海中絳雪流珠浦　海中の絳雪 珠浦に流れ

天半朱霞映錫方　天半の朱霞　錫方に映ず
量酒全欺燕玉色　酒に量して　全く欺く　燕玉の色
照人分得旱金光*　人を照して　分ち得たり　旱金の光
一枝莫被東風覺　一枝　東風の被に覺まさるる莫れ
留與春閨伴醉妝　留めて春閨の與に　醉妝に伴はん

* 西番に旱金花有り。其の光　人を爍かす。

五

稿中すでに結語めいたことを記した本稿は、往年の吉川幸次郎教授講義録「清初詩論」から、次の一節を引かせていただいて結びに代える。

昔　嚴滄浪云ふ、詩に別才有り、學問に關するに非ず、と。竊に謂らく、此の語唐以前に施す可し、未だ宜しく宋以後に施す可からず、と。宋以後の詩は、多く直致の語を非とし、學問を以て之を軸く。乃ち思致有り。明人未だ能く之を知らず、清人は能く之を知る。